熊野の森から

怪しの熊野

其の二十六「大蛇」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

熊野の山中には、たくさんの大蛇伝承が残っている。有名な「安珍清姫」の話では、安珍に逃げられた中辺路の真砂のお姫様、清姫が悲しみのあまりに大蛇に変化し、最後には道成寺にて安珍を焼き殺してしまう。大蛇伝承は、川、滝、沼など水辺での男女の悲恋話か、不思議な美女が現れその正体を探ったところ実は大蛇だったという内容が多い。中辺路町の内井川にある夫婦滝、温川（ぬるみがわ）の十国（じっこく）谷、日置川の安宅（あたぎ）、北山村の久保の小女郎の話などにみられる。新宮の浮島の森に伝わるおいの伝承もその一つだ。本宮の平治川の滝の主は美しい男の大蛇だったという。龍神村の底主人（そこうず）、大塔村の合川（ごうがわ）のモリトウさんは正体不明の大きな動く何かだったようだ。古座の鯛島と河内島（こうちじま）には、魚の鯛と大蛇の少し寂しい恋話が伝わる。

平成23年の紀伊半島大水害では、新しい滝ができるなど土砂災害で一夜にして地形が大きく変わった場所があった。まるで大蛇が暴れ回ったかのようだ。災害をイメージさせる大蛇伝承は各地に残るが、紀伊半島には特に多い。

古座の鯛島は、隣の九龍島（くるじま）とともにテレビの無人島体験の第一話の舞台として知られるようになったが、恋しい大蛇と離ればなれになった鯛が石になってできた島だ。ちゃんと目玉がある。古座川を上った大蛇の方は、鯛を思って河内島（こうちじま）になった。

和歌山県ではないが、奈良県の十津川には大蛇伝承が驚くほど多い。男女の話だけでなく、鬼女の話、祟（たた）りの話など内容はさまざまだが、集落ごとに大蛇が出没した印象を持つほどに多い。なぜ、これほどにまで大蛇の話が多いのか、一つの仮説を考えている。それは、災害との関係だ。平成23年の紀伊半島大水害の苦く悲しい記憶は未だ癒えないが、多数の深層崩壊、土砂崩れ、土石流が人々の暮らしを襲った。一晩で忽然（こつぜん）と現れた滝や扇状地を前に、地形というのは災害など突発的な時に大きく変化するということを学んだ人は多いだろう。全国をみると、災害は大蛇が暴れたせいだという伝承は多く、神話の八岐大蛇の話などはその代表だ。紀伊半島大水害でも十津川は大ダメージを受けたが、この地に大蛇伝承が多く残っていることと災害の話は無関係ではないだろう。

ところで、一般的には女の執念深さだと語られる「安珍清姫」は『今昔物語集』の中に原話がみられるが、最後には法華経の力で苦しみから救われるという内容、つまり宣教となっている。一方、地元では、清姫は蛇になんかは変化せず、悲観して入水したと伝わる。昔は、とかく男を過剰に美化しがちなので、実は地元の話の方が本当だったのではないかと思う。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。